

令和6年度 赤穂市認知症地域支援推進員活動報告

- 1 認知症地域支援推進員 6名(専任1名、兼任5名)
- 2 認知症地域支援推進員の役割
 - (1)認知症初期集中支援事業の推進
 - (2)認知症サポーター養成の推進
 - (3)チームオレンジの設置及び支援
 - (4)オレンジカフェ(認知症カフェ)の設置及び支援
 - (5)認知症ケアパスの作成及び活用
 - (6)若年性認知症の人と家族の支援

報告者氏名 折原 和彦

赤穂市認知症施策全体図

・皆で認知症を理解し、皆で備える(共生社会の実現)

*気づく 家族、民生委員、住民、在宅介護支援センター、警察等からの情報

*つなぐ ケアマネジャー、リハビリ専門職、福祉事務所等との情報共有

*支える チームオレンジ、オレンジカフェ、福祉・医療・介護等の多職種連携

・フレイル予防で認知症予防・・・フレイル予防の切り札「え・こ・う・し」が合言葉

*えこうし運動(栄養・口腔・運動・社会参加の頭文字)



チームオレンジ その設置・運営・育成

* 地域共生社会・認知症バリアフリーの実現に向けての取組

* 社会的背景に対応し、チームによる一体的支援の開始

・いきいき百歳体操やオレンジカフェなど支え合い活動の活発化

・通いの場等を拠点に3つの「チームオレンジ」が活動

・定期的な情報交換によるメンバーのスキルアップ

・チームオレンジの連携による世界アルツハイマーデーでの啓発

(市のシンボルである赤穂城をオレンジにライトアップ 9月21日)

(イオン赤穂店でのアルツハイマーデーの啓発イベント 9月21日)

(図書館での認知症に関する書籍の企画展示 9月月間)

◇天神山チームオレンジ◇

設置 赤穂市折方天神山地区(天神山集会所)令和4年12月設置

運営 いきいき百歳体操実施団体 約30人 スタッフは約10人

概要 赤穂市西部、折方地域の天神山地区

・昭和40年代に塩田跡地に大手電機会社工場が立地、阪神地区の同じ電機会社の多くの従業員が転勤し、発展した地区

・国道沿いの小高い山が宅地造成された立地で、坂道に1軒家が並んでおり、市中心部からは、車で約20分の距離

・住民は、ほぼ同時期に転入し、順々に定年を迎えている。

・天神山自治会は、令和3年12月で人口403人、高齢者225人で高齢化率は、55.8%で同時期の市の高齢化率33.4%を大きく上回っている。

・モットーは、百歳体操に出てこない人を見守り、声掛けの継続、そのような人のため、純喫茶「天神さん」を開設、開放

◇チームオレンジ うみ・かふえ◇

設置 赤穂市坂越東之町地区(坂越防災交流館)令和4年12月設置

運営 いきいき百歳体操実施団体 約30人 スタッフは約10人

概要 赤穂市南部、坂越地域の坂越ふるさと海岸に交流館は立地

- ・北前船の風待港であり、高台の神社からの瀬戸内海の渚は絶景
- ・港に続く石畳の街並みに造り酒屋や古民家活用の喫茶、商店が並ぶ。
- ・毎日曜日にいきいき百歳体操をメインに音楽会、芝居なども実施
- ・助け合う地域づくり、自然災害から命を守るための防災教育も実施
- ・第1・3木曜に商店減少に対応した移動・買物支援も実施
- ・令和4年4月に認知症カフェも開始し、軽食等も提供
- ・参加者は、坂越地域のみならず、地域外や市外参加者もある。
- ・いきいき百歳体操に来ない人には、見守りや参加の声掛けを継続実施

◇千種ハイランドチームオレンジ◇

設置 赤穂市木津千種ハイランド地区(千種集会所)令和6年10月設置

運営 地域福祉活動に熱心な人による運営 約20人 スタッフは約5人

概要 赤穂市東部、木津地域の千種ハイランドで活動

- ・清流千種川の西側の丘陵地が宅地開発された地域である。
- ・ログハウス等の建築が可能であり、全国から転入者があり、市内や近隣都市に親戚のない世帯も多いが、逆に近隣同士のつながりもある。
- ・地区全体に急坂が多く、移動には車や単車が欠かせない状況であり、買物や交通手段の確保に住民は不安を持っている。
- ・住民の交流拠点の千種集会所が地区の中心部にあり、いきいき百歳体操やサロン、カラオケ、料理教室などの活動が行われている。
- ・チームオレンジが千種自治会の活動団体として登録された。

◇チームオレンジに期待できること(メリット)◇

チームオレンジのある地域にとって

- ・見守り活動や支援で地域の新しい絆が生まれる。
- ・認知症や軽度認知障害の人が地域で長く生活できる。

オレンジメンバー(支え・支えられる人)にとって

- ・自分達の活動が社会に貢献しているという実感がある。
- ・活動による新しい仲間づくりや健康維持と増進が図れる。

社会全体(自治体など)にとって

- ・ゆるやかに支え合うチームで高齢社会を乗り切る。
- ・そのチームをモデルとして深め、広げていく。

◇これからの思いと展望◇

- * 認知症は、長寿社会では避けて通れない社会課題といえます。
- * 長寿社会では、「支え・支えられる」が地域づくりのポイントです。
- * そのため、お互いを支え合う「認知症サポーター」のエネルギーの結晶として「チームオレンジ」の育成・支援が大切です。
- * 認知症サポーターのシンボル色であるオレンジは「手助けします」という意味があり、「チームオレンジ」は、活動のエネルギーを感じる快い響きを感じられます。
- * 「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」も施行され、チームオレンジを手段として、今と未来をともに創っていきます。